675
2016年
10月発行

よろこびの泉

わたし（イエス・キリスト）が与える
水を飲む者はだれでも、
決して渇くことがありません。
私が与える水は、その人の
うちで泉となり、永遠の
いのちへの水がわき出ます。
新約聖書　ヨハネ4：14

藤原宮跡秋景色

よかった

河野　進

せっかく
ここまで来たのだから
ついでに寄って行こう
やっぱり声をかけてよかった
バスにのりおくれようが
日が暮れようが
訪ねてよかった
こんなに喜んでくれるとは

河野進詩集「萬華鏡」より

発行所　〒630-0266　奈良県生駒市門前町七―四〇　日本ミッション
電話〇七四三（七三）一七五四　振替口座〇〇九三〇―二六六四二番
発行人　ファベイ・D
編集人　日本ミッション編集部
印刷所　〒350-0303　埼玉県比企郡鳩山町熊井一七〇
電話〇四九（二九六）〇七二七　新生宣教団印刷部
定価　一年分　送料共　九〇〇円
一部　一八円

質問箱

問　就職した会社ではパソコン（PC）が1台ずつ与えられ、各部門毎に毎日正確なデーターを本部に報告しなければなりません。夜、夢にまでパソコンが現れ体の調子も悪くなり悩んでいます。現状から脱出したいです。

答　友人から聞いた話です。八歳のお孫さんが夏休みに泊まりに来た時、「こんにちは」と挨拶をしたかと思うと友人のPCの前に行き、1人で機械を立ち上げ、大好きな『バットマン』の映像や関連グッズを調べて遊び始めました。友人に助けを求めて来たのは、ローマ字変換をするためにアルファベットを聞きに来ただけだったそうです。

さて、現代はどんな職種でも、難易の差はあってもPCが自由に操作できなければ働けない社会です。会社の中は勿論、病院、個人商店、私が行く理容院にもPCは設置されていて、操作されれば機器は能力を発揮し、各職種の発展や作業の正確且つ高速化の助けになっています。

二昔前位までは「PCのことは分かりません」というセリフがまかり通っていました（その頃の機械は一寸難物でした）が、現在は違います。前述しましたように小学2年の子どもでも教えれば使えるようになるのです。

勿論、仕事となればそんなに簡単な内容ではないでしょう。でもそれを避けては通れません。今やPCの導入のない職場は皆無とも言えるからです。難題を乗り越えるためには学ぶ姿勢も大切です。その姿勢があれば周囲の職場の人たちも助けてくれるはずです。

聖書の中にはこういう言葉があります。

「あなたがたの中に知恵の欠けた人がいるなら、その人は、誰にでも惜しげなく、とがめることなくお与えになる神に願いなさい。そうすればきっと与えられます。」（ヤコブ1・5）

自分の力だけに頼らずイエス・キリストにより父なる神に頼り、勝ち進む人生を歩んでください。

（児玉　博之）

親と子のしあわせ 385

私の勤める幼稚園では毎日礼拝があり讃美歌を歌ってお祈りをしますが、こどもたちのお祈りは素敵です。「かみさま、おはようございます。○○ちゃんの風邪が良くなるようにお守りください。」「もうすぐ遠足です。お天気になるようにおねがいします。」自分で考えてお祈りします。あるお母さんは、「家でもお祈りするんですよ。自分のことでなく、お友だちやおばあちゃんのことを。お祈りはいいですね」と言ってくださいます。

ある年のこと、運動会の日が晴れるようにみんなで毎日お祈りしていました。しかし、週間予報では雨マークです。こどもたちの話し声が聞こえてきました。「運動会は雨だってお母さんが言っていたよ。」「でもね。お祈りしているから分からないよ。」「でも、雨ってお母さんが言っていた。」「神さまが決めるんだよ」と、可愛いやり取りです。神さまはどうされるのでしょう。続けてお祈りしていました。

運動会の前日は、雨でした。他の園ではすでに延期を決定していました。でも牧師の園長先生（主人）は、「出来る」と言うのです。祈っていて、確信が与えられたそうです。当日の朝も、まだ雨が上がらず「難しいんじゃない？」と尋ねましたが、園長先生は運動会をすると言いました。

運動会が始まると、見事に空が晴れてきました。びっくりするくらい良いお天気になって、保護者の方は、「高岸幼稚園には神さまがおられてお祈りを聞いてくださった」と喜んでくださり、こどもたちもお祈りが聞かれたと大喜びしました。

祈りは、すぐに答えられることもあれば、長い時間かかって答えられることや、自分の願いとは違う形で答えられることもあります。けれども、私たちの祈りに喜んで耳を傾けてくださる神さまは、祈る者に必ず慰めと力を与えてくださいます。

「何も思い煩わないで、あらゆるばあいに、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。」（ピリピ4・6）

（相原　幸紀美）

＊この「よろこびの泉」は、統一協会、エホバの証人、モルモン教のものではありません。
これらの問題でお困りの方は、上記の教会にご連絡ください。

●質問箱への投書（100文字以内）よろこびの泉に関するお問い合わせは Izumi@japanmission.org まで

死の恐れからの解放

一過性のものなのか、性格のゆえなのか、私は常に死に怯えていました。その恐れから逃れるために仕事や読書、そして娯楽への逃避。しかしそれらは決して私の心に平安をもたらしませんでした。

大津市　城谷　定利

▲自宅の居間で、妻と共に

死の恐れを紛らわすために

私は一九三九年一一月に京都で生まれました。二十五歳の時、生まれて初めて教会へ行き、イエス・キリストの救いを受けましたが、それまでは、弱い者や人生の敗北者が宗教により頼むのだと思っていました。そのように思いながら私自身、死に対する恐怖心を持っていたのです。

それが貧しい環境で育ち、中学3年の時、父が45歳の若さでアルコール依存症が原因で亡くなったことからか、それとも、高校受験に失敗し、経済的な理由で4年間、働きながら定時制高校へ行き、劣等感で性格が暗かった故か、また、青年期に起こる一過性のものなのか、よくわかりませんが、今、言えることは、死の恐れという悩みを通して、神様が摂理の内に私を選んでくださったということです。

「あなたがたがわたしを選んだのではありません。わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命したのです。」（ヨハネ15・16）

私は死の恐れから逃れるために仕事に没頭し、人生論的な書籍を読んだり、パチンコやダンスなど世の快楽に身を委ねたりしましたが、何の解決にもなりませんでした。むしろ虚しさが募るばかりで、自殺さえ考えるようになりました。

恐る恐る教会へ

そんな折、会社の帰りに電柱に張られていたポスターが目に留まり、夜、恐る恐る教会へ行きました。それは「特別伝道集会」のポスターでした。中に入ると青年たちが元気に手を叩いて賛美していました。やがてメッセージが語られましたが、その話し手は情熱的でしかも分かりやすく、初心者の私はとても感銘を受けました。最後に、「今晩、イエス様を信じたい方は、前に進み出てください」という講師からの招きの言葉があり、藁にもすがる思いで前に行き、イエス様を受け入れました。3日間の集会で話の内容は、忘れましたが2つの聖書の言葉が心に残りました。

「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」（マタイ11・28）

「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。」（ヨハネ14・6）

信じて直ぐに死の恐れから解放されたのではありません。その後、何も分からないまま洗礼を受け（一九六四年一一月一五日）教会に通い、礼拝の中で牧師の話を聞き、聖書を読み、祈り、教会に来ておられる方々との交流、時には教会から遠ざかることもありましたが、信仰の友の訪問を受けて回復され、そうした中で、4か月位経った頃でしょうか、いつしか死の恐れから解放されている自分を見出しました。

福音を伝えたいのだが！

その後、人の罪を赦し、永遠の命を与え、心を変革し、人生に目的を与えるイエス・キリストの十字架と復活の素晴らしい福音を伝える伝道者になりたいという願いが起こされて来ました。そんな時「伝道献身者奨励日」に来られた牧師が「収穫は多いが、働き手が少ない。」（マタイ9・37）と語られ、私は将来牧師になる決心をし、数か月後、かなり迷いましたが、母の反対を押し切り、神学校への入学準備をするため、会社を退職しました。

しかし、準備をする中で私の心は、不安と恐れで揺れ動き「自分は指導力・学歴もない、口下手で話も苦手、そして、何の経済的な保障もない。私の大好きな旅行も出来なくなるのではないか」と、すっかり自信を無くしてしまい、丁度、旧約聖書に出てくる預言者ヨナが神様から、福音宣教に行け、と命じられたにも拘わらず逃げたように、私は北海道へ逃げ、また、広島にも行きました。母親、兄弟姉妹（私の他に5人）、教会の人たちの前で神学校の入学を表明していた手前、恥ずかしく、人知れず遠くに行って一人で生活しょうと思ったからです。

ところが、どこへ逃れても心に平安はありません。私はおめおめと実家に戻って来ました。その後の数か月は、私の人生において最も心の中に葛藤を覚えた時期でした。

キリストのために生きる

ある日、何気なくテレビのスイッチを入れると、英国海外航空機ボーイング707が、富士山付近の上空で乱気流に巻き込まれ空中分解し、乗員乗客124人全員が死亡したという悲しいニュースが私の目に飛び込んで来ました。その日は、一九六六年（昭和四十一年）三月五日で神学校へ入学予定の43日前でした。その時私の心の中から、私がその飛行機に乗っていて、死んだつもりになって イエス・キリストに従って行こう、同じ苦労の人生ならキリストのために生きようという決心が与えられ、心配事を全部神様にお任せ致しました。

「心のうちで死を覚悟し、自分自身を頼みとしないで、死人をよみがえらせて下さる神を頼みとするに至った。」（Ⅱコリント1・9口語訳）というみ言葉が心に響きました。この聖書の言葉は、39年間の牧師生活の中で、幾度となく辛いことがあり牧師を退こうと考えた時の私の支えとなりました。

あふれる恵み

これらのことを母教会の牧師に話した後、神様の導きによって、今までの全ての罪を涙ながらに告白しました。しかし、洗いざらい罪の告白をしたので、もう私は神学校の入学は許可されないのではないかと思いました。「入学の資格はあります」と言われた時、喜びと共に平安が私の心を包みました。

5年間の神学校の学びを終え、卒業と同時に今の妻と神学校で結婚式を挙げました。妻とは、同教会出身で同じ1期生、学びを共にした仲でした。7年間、鳥取県米子市の教会で奉仕後、32年間、大阪四條畷市にある忍ケ丘キリスト教会に仕え、二〇一〇年三月、七十歳で定年引退しました。

この間、経済的な面において、一時は貧しい生活もしましたが、農家の方からお米や野菜を頂いたり、見知らぬ人からの送金などがあったりして奇跡的に支えられました。また、牧師になれば海外旅行などはできなくなると思っていましたが、何と神さまは、今まで公私に亘り32回38ヶ国へ行かせて下さったのです。誠に主の恵みと憐れみに満ちた人生で、それは現在もなお続いています。

「わがたましいよ。主をほめたたえよ。主の良くしてくださったことを何一つ忘れるな。」（詩篇103・2）